真・恋姫†萌将伝 ～群雄割拠再び？～

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†萌将伝　～群雄割拠再び？～

【Ｎコード】
Ｎ９２８１Ｘ

【作者名】
イルカ

【あらすじ】
萌将伝の記憶を持った恋姫達が、原作開始前にタイムスリップ！！！
群雄割拠を乗り越え、大陸に平和を齎した恋姫達。二度目の荒廃した世界をどう生きるのか？
群雄割拠は再び起こるのか？
仲良くなった者達に刃を向ける事ができるのか？
そして、北郷一刀は…その内出ます。

序章、閉じた外史、生まれた外史

後漢王朝末期――
三国時代と呼ばれる群雄割拠の時代
それぞれの理想、野望、想いを胸に戦い抜き
世界に平和を齎した英傑達。
その傍には常に、管賂の予言通り、天の御遣い・北郷一刀がいた。

『荒廃せし世を導く者あり
その者、流星と共に現れ
世に平和を齎す。
即ち、天の御遣い也――。』

英傑の数だけ天の御遣いが遣わされ、その数だけ広がった世界。
ある者はこれをパラレルワールドと言い、ある者は外史と呼ぶ。
そして、この外史――

英傑達はそれぞれの外史で乱世に平和を齎した。
戦後処理政策として北郷一刀を御旗とした三国連合を発足。
『三国連合の御旗、天の御遣い・北郷一刀』
この事柄が世界に与えた影響が強過ぎ、北郷一刀を触媒として外史が引き寄せ合い、繋がり、混ざり、融合し、矯正され、やがてひとつの世界として、統一された。

『天の御遣い、一人の想いの為に力を振るう
一人の思い叶いし時、始まりは終わりへと至る』

この統一された世界も、他の外史と同じ様に、時が経てば消えゆく

定めであった。
しかし、外史の融合の結果、取り込んだ外史分だけ世界の寿命を伸ばした。
更には、融合していない外史までも、北郷一刀を触媒として吸収しはじめた。
が、遂にこの三国連合の世界も、寿命が尽き、終焉を迎える。
が、全ての消滅を逃れるかのように、吸収されかけた外史に英雄達の想いと記憶が混ざり、新たな外史として誕生した。

その外史の扉が、いま開かれる――。

1、それぞれの始まり（前書き）

それぞれのお話。
時系列はバラバラです。

1、それぞれの始まり

／冥琳

はぁ～、やっぱりこうなってしまうか。

「雪蓮、もうこの辺でいいだろう？」

「何言ってんの？これからが本番じゃない」

そう言って、美羽…袁術に向かって黒い笑いを浮かべる孫呉の王。

と言っても、今の身分は美羽の客将。

「美羽～？今度はね～前みたいな事はしたくないな～って、思ってるのよね～？」

「しぇ、雪蓮…わ、妾も、もう怖い思いはしたくないのじゃ」

政務室の隅でガタガタと震えている美羽。

「おい、雪蓮。この辺で止めておけ。泣いてるではないか」

七乃と抱き合いながら目に涙を溜めている。その目が一瞬、私を見て、

「わ、妾は、な、泣いてなぞおらぬぞ！」　と精一杯、虚勢を張る。

「ふ～ん…そっかそっか。前は泣いてたのに強くなったじゃない。それで、そんな美羽ちゃんはこれからどうしたいのかな～？」

前回の事を思い出したのか「ひっ」と息を飲む美羽と七乃。

「わ、妾は…妾は…そ、そうじゃ！妾はこれから七乃と一緒に、主様を探しに行くのじゃ！今決めたのじゃ！！だからこんな城はぬしにくれてやるのじゃ！！」

わっはっは、参ったか～！と、笑う美羽。

あっはっは、さっすが美羽！と、笑う雪蓮。

こんな脅しで手には入るぐらいなら、前回あれ程まで苦労する事はなかったのではないか。

二人の笑いが響く部屋で、そんな事を思った。

／白蓮

街に出ると懐かしい顔が揃っていた。

「伯珪様、おはようございます」

「お～、太守の嬢ちゃん、今日もいい天気でさ～ね」

一人一人に挨拶をして歩く。　昔懐かしい光景に、少し涙が滲んだのは内緒だ。

「たいしゅさま？ないてるの？どっか、いたいの？いたいいたいしてあげようか？」

……内緒だ。

って、こんなに小さな子に見られたんじゃ仕方ないな。

「あ～、もう大丈夫。目にゴミが入っただけなんだ。ありがとうな」

そう誤魔化して、少女の頭を撫でる。

「あらあら、太守様すみません。珪歌ちゃん、太守様にありがとうは？」

「んー？たいしゅさまありがとー」

首を傾げてから、そう言ってニカッと笑う少女。

なぜ私がまたここに居るのか。一体何があったのか。なんて私が考えたって分かる筈はない。だけど、ひとつだけ分かる事がある。

今度は、今度こそは絶対にこの幽州を守り抜く！

少女の笑顔を見て、決意を新たにした。

／蒲公英

「母上っ！！！」

おねーさまがそう言って、おば様に駆け寄った。

「こら、翠。いきなり抱き付いて来てどうしたと言うのだ」

そう言ったおば様の言葉もおねーさまには聞こえないのか、母上！母上！と泣きながら抱き付いている。
困った顔で蒲公英を見るおば様。
「何があったのか分からないけど…蒲公英も同じみたいね」
――こっちへいらっしゃい。
笑顔でそう言って、手招きをするおば様。だから蒲公英は、
「おば様…おばさまー…うわぁ～ん！…っ」
泣きながら抱き付いちゃって。
蒲公英にはお母様がいないけど、おば様がお母様みたいだから、
「おばさまー…おばさまー…おかーさまー……うわぁ～んっ――」
って、いつの間にか、おかー様おかー様って叫んじゃっててて、泣き疲れて、眠ったって。
後でおば様が笑いながら言ってた。

／真桜

凪が大変な事になっとる。
もう三日も魂が抜けたような感じや。まー気持ちは分からんでもないけど。
「なー沙和、このままやったら、凪が使いもんにならなくなるんとちゃうか？」
「うーん…沙和もそう思うのー」
「せやけどなー…隊長、今何処におるんか分からんしなー」
三日前、気が付いたら昔の家で寝とった。
今までの事が夢だったんかなー思っとったら「凪ちゃんが大変なのー」と沙和が駆け込んで来てな。そのまま連凪の家まで連れて行かれたんや。
凪の家に着いたら、凪の奴「隊長…隊長…」と連呼しながらフラフラと彷徨ってたんや。

こりゃーあかんと思って色々話したんやけどな？耳から耳へと抜けとった。
心ここに在らずや。
「隊長、華琳様のとこに居るんやろか？」
と、沙和に聞く。
「そんなの沙和にはわからないの。でもこのままここにいても隊長にはきっと沙和達を探せないと思うの。だから、沙和達が見つけないとダメだと思うの」
おぉー？こりゃ意外や。沙和の奴もちゃんと考えとるやん。
まー、隊長の事だからやろうけどな。
「せやな。待っとったっていつになるのか分からんのやし。なら、うちらが探さなあかんな」
「そうなのそうなの！それに、うまくいけば隊長の事独占できるかもなのー」
「おおぉ！？それは盲点やった！！でかした沙和！ほんま冴えとるやんか！」
思わず沙和を抱き締めようとした時、
「隊長を独占だとぉー！！！！！！！！」
凪が突然雄叫びを上げた。
「沙和！真桜！そうと決まればこうしてはおれん！すぐに隊長を探しに行くぞ！！！！」
「凄いの凪ちゃん！復活したのなのー！」
「めちゃくちゃ元気やないか…さすがうちらの隊長や」
沙和と二人で、なんや騒いどる凪を見て思わずつぶやいた。
こうしてうちらの旅は始まったんや。

1、それぞれの始まり（後書き）

次回も、短めの個人パートになります。

文章の始めに一文字分空けるか空けないか迷ってます。

アドバイス有りましたらお願いします。

2、それぞれの始まり？（前書き）

まだ個人パートです。
短い話ばかりです。

2、それぞれの始まり？

／朱里

「う～…ご主人様～…何処ですか～？」

雛里ちゃん、今日も夢でご主人様を探しているのかな？

水鏡先生の塾を出てから今日で三日目。

寮の寝台で起きた時は驚いたけど、雛里ちゃんと相談して桃香様やご主人様を探そうってなって。雛里ちゃんにも三国連合の記憶があったから、多分、他のみんなも記憶を持っているだろうって。でも、幽州までは遠いから、紫苑さんか月ちゃんのところに行って、記憶の事を確かめようってなって。でも、紫苑さんのところに行ったら、幽州まで遠いから、やっぱり月ちゃんのところに行こうってなって。でもでも、洛陽は怖いかもって雛里ちゃんが言うから、やっぱり直接幽州に行って白蓮さんに会おうって決まって。

それから旅に出たのはいいんだけど、毎晩雛里ちゃんがご主人様って泣いて。

私は親友だけどお姉さんみたいなものだし、私がしっかりしないと雛里ちゃんも心細いと思うから。

だから、はやくご主人様に会いたいです。

／雛里

「う～…ご主人様～…何処にいますか～？」

朱里ちゃん、今日も夢でご主人様を探してるのかな？

水鏡先生の塾を出て今日で四日目。

寮の寝台で起きた時は驚いて泣いちゃったけど、朱里ちゃんと相談してご主人様と桃香様を探そうって。朱里ちゃんにも三国連合の記憶があったから、多分、他のみんなも記憶を持っていると思うって。

でも、幽州までは遠いよ？って言ったら、紫苑さんか月ちゃんのところに行って、記憶の事確かめようって決まって。でも、紫苑さんのところに行ったら幽州まで遠いよねってなって、やっぱり月ちゃんのところに行こうって決まったけど、洛陽はちょっと怖いかもって言ったら、やっぱり幽州に直接行って白蓮さんに会おうって決まって。

それから旅に出たのはいいんだけど、朱里ちゃんが毎晩ご主人様って泣いて。

親友の朱里ちゃんにはいつも助けてもらってるから、今度は私がしっかりしなくちゃって思ったんだけど。

だけど、ご主人様…はやく会いたいよぉ。

／桃香

起きたら知らない街の宿屋さんで眠っちゃってたみたい。

何でこんな所にいるんだろう？みんなはどうしちゃったのかな？

そう思って外に出てみたら…。

昔はよくこんな光景見てたなぁ～。

盗賊に荒らされた後の村。

お金が無かったから、黙って泊まらせてもらっちゃってたなぁ～。

でも、朝起きたら誰もいなくって。

その代わり色んな所に死体があって。

前の日からずっと、穴を掘って埋めて。

疲れて動けなくなったら宿屋さんで眠って。

起きたらまた穴を掘って、死体を埋めて。

涙を流しながら、どうしてみんなで笑っていられないのだろう？って穴を掘って。

どうして私に力が無いんだろう？って、涙が止まらないまま死体を埋めて。

小さな子供を埋める時には「ごめんなさい」って涙で前が見えなくなって。
――そう、こんなふうに。
「あれ？何で、涙がでてるのかな？」
「どうして私はまた、こうやって穴を、掘って、いるのかな？」
「平和に、なったの…に、なんで、みんな死んじゃっ…てるの？」
「涙が…止まらないよ…でも、穴掘って、埋めて上げないと…」
「なんで？…なにもできなくて……ごめんなさい…ごめんなさい」
「愛紗ちゃん…鈴々ちゃん…ご主人様…みんなどこにいるの……」
ずっとずっと、穴を掘って、死体を埋めて――。

／流琉
兄様、お元気ですか？
今私は、季衣と二人で旅をしています。
五日前に起きた時、私は昔住んでいた村の私の家にいました。楽しくて幸せな夢を見ていたんだな～って思いました。
兄様は知ってましたか？
そういう夢って、覚めた時に凄く切なくなるんだって。
華琳様や兄様がいて、秋蘭様や春蘭様、風さんや稟さん…凪さん達…。
皆さんで騒いで遊んで戦って。
兄様に新しい料理を教えてもらって。
そんな毎日をもう過ごせないのかと思ったら、涙がでちゃって――。
「流琉！にーちゃんたちのところに行こう！！」
そんな時に、季衣がそう言いながら部屋まで入って来ました。疑問に思った事を季衣に話しても「難しい事はわかんないから、とにかく行くよー！」って。
ほんとに季衣ってば変わらないなぁ～って思いながら、私は旅支度を始めました。

季衣ってば、一回決めたら強引にでもそうしようとするから。そうして、二人の旅が始まりました。
って言っても、華琳様の居る陳留までですけど。

あっ、そうだ！
昨日、美羽ちゃんと七乃さんに会いました。
こっちに来て初めて知った人に会えたから、最初はちょっと不安でした。
「おー？華琳のところのちびっ子二人なのじゃー」
って、美羽ちゃんが言ってきたから安心しました。
美羽ちゃんと季衣が「お前の方がちびっ子だぞー」「なんじゃとー！？」って、騒いでる横で、七乃さんと話をしました。
なんでも、兄様を探すために雪蓮さんに地位を譲ってきたんだそうです。
確かにお二人とも兄様に懐いていましたけど、そこまでするなんて凄いと思いました。
私達はやっぱり魏の武将だから。
華琳様の親衛隊を辞めるなんて考えられません。
私達は華琳様のところへ向かうから、美羽ちゃん達の方が先に兄様に会うのかな？
そう思ったら、ちょっとだけ胸がチクッとしたけど、またみんなで騒げればいいかな？って、思う事にしました。
もう、華琳様のいる陳留が見えてきましたので、この辺で失礼しますね。

2、それぞれの始まり？（後書き）

流琉の話し方が掴めない…。

3、それぞれの始まり？（前書き）

徐々に話が進む恋姫もいますが、まだ短い話ばかりです。

3、それぞれの始まり？

／焔耶

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様。

あー！！！！桃香様！！！

桃香様桃香様桃香様桃香様！

一体何処に！！！

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様——。

最近、周りの奴らがワタシを避けてる。が、関係無い。

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様——。

今日、解雇された。
そうだ！幽州へ行こう！

／愛紗

その姿を見た時、見つけ出した喜びより、ここに辿り着くまで考

えていた事が的中してしまったのか？という不安の方が強まった。

――と、桃香様？一体それは…っ！？

胸を槍で貫かれた様な衝撃。

「桃香様っ！！！！！」

叫ぶ。と、同時に駆け出す。

「おねーちゃん！！！」

鈴々も同じ思いなのだろう。

並んで走る。

――まさか！そんな！

嫌な予感が頭から背中を伝い、身体が震える。そんな物、知った事ではない！と、走る。

傍まで駆け寄った時に桃香様がやっと、私と鈴々に気付かれた。

漠然とした予感はあった。

優し過ぎる桃香様だから。

他人の為にこそ、涙を流すようなお人だから――。

「あっ！愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

だから、もし、折角築かれた平和な世界が、皆が笑って居られた世界が…夢の中の出来事だったら――。

「お姉ちゃん……」

「桃香様…」

「皆に紹介しなくちゃね！」

桃香様は、どう思うのだろう？もう一度、平和な世界を築くために立ち上がって下さるのか。それとも――。

「早く他のみんなにも紹介したいな～。みんな仲良くなってくれるかなぁ～？」

それとも…現実を受け入れられず、壊れてしまわれるかもしれない――。

桃香様は笑顔で話しながら、綺麗に並べられ、座らされた子供達の死体を優しく撫でる。

「――くっ！だから…だから早く、桃香様と合流しなければ！そう思って走って来たというのに！」

思わず叫んだ。

「璃々ちゃんや美以ちゃんも、お友達が沢山増えて喜んでくれるかなぁ～？」

私は、震えて力の出ない身体を動かし、それでも何とか優しく桃香様を抱き締めた。

泣きながら私達にしがみつく鈴々。

そんな二人を見て、私は世界を呪った。

／亞莎

今、私達は全員、雪蓮様の緊急召集により謁見の間に来ています。

「皆、揃ったようだな。ではこれより会議を始める。先ずは現状についてだ」

冥琳様の司会で会議が始まりました。でも、美羽ちゃんのお城で勝手に会議をして大丈夫なのでしょうか？

「皆ももう知っているだろうが、我々はどうやら過去に飛ばされたようだ」

そうです。今朝起きてから明命や祭さん、思春さんと確認をしました。吃驚しました。

一刀様もこんな風に驚いたのでしょうか？

「一応確認しておくが、未来から来ていない者がいたら手を挙げてくれ」

みんな手を挙げません。

「いないな。わかった。では――」

やっぱり美羽ちゃん達も未来から来たのでしょうか？だからこの場所を貸してくれたのでしょうか？

「――現状の確認は以上。次は雪蓮から今後の方針に付いて話してもらう」

そう言って後ろへ下がる冥琳様と、椅子から立ち上がり前へ出る

雪蓮様。

「さっき、美羽からこの城を譲ってもらったから」

笑顔を浮かべて衝撃的な発言をしました。

一瞬、時間が止まったかと思いました。

静寂が時を支配するってこういう場面を言うんですね。

「さっき、美羽からこのお城を譲ってもらったから」

時を動かしたのはやっぱり雪蓮様の一言でした。

「あ～策殿、二回言わなくてもちゃんと聞こえてたわい」

「そうなの？それならそうと反応くらいしてよねー」

ぶーっと、顔を膨らます雪蓮様。

「お、お姉様が急に変なことを言うからじゃないですか」

「じゃーどう言えばいいのよー」

「そう言われると――」

ガヤガヤと騒がしくなる謁見の間。祭さんと蓮華様が雪蓮様に詰め寄り、冥琳様は苦笑しながらそれを眺めてます。

「あ、あの！！！」

突然上がった大声に場が鎮まり、皆さん声の上がった方を見ます。

そこにいるのは明命。

「み、明命？」

「明命ちゃ～ん？」

「どうしたというのじゃ」

普段の穏やかな顔ではなく、キッとした目で雪蓮様を見つめている明命。

何とも言えない迫力が、その…ちょっと怖いです。

「はっ！？あぅ…その…すいません。突然大声を上げてしまって」

我に返った様に顔を赤くしながら俯き、謝る明命。

一体どうしたのでしょう？

「明命。この後私の所に来なさい。冥琳もいいわね」

「はい…」

「あぁ、分かっている」

頷き合う雪蓮様と冥琳様。

「では最後に…残念だけど、美羽には死んでもらったから」

まさか…？

ザワッとなる広間の中、明命がまた、キッと顔を上げて、

「雪れ――」

「冗談よ！！！！！」

「うむ。美羽と七乃は北郷を探しに行くと言って、我らに城を明け渡した。だから、心配する事はない。以上だ。解散」

明命が雪蓮様に呼び掛けようとしたのを、雪蓮様が遮り、冥琳様がまくし立てる様に言葉を続けた。
そして、いつの間にかに場が解散になっていた。
明命を連れて出て行く雪蓮様と冥琳様。
その場に残った私達は、暫くの間、訳の分からないまま呆然と立っているだけでした。

3、それぞれの始まり？（後書き）

桃香様、ごめんなさい。
愛紗、鈴々と一緒なら違うんでしょうが…。
独自解釈であります。

メールで書いてますが、閲覧すると一段落目が半角だったり全角だったり。
編集でなかなか揃わなかったので、今回は左詰めです。
読みにくければ教えて下さい。

4、華琳の場合（前書き）

今回は華琳様です。

4、華琳の場合

／華琳

「知らない天井だわ…」

それもそうね。私達は昨日、南陽に泊まったのだから。

そう思ったが、寝る前と雰囲気が違う違和感。それに、何処か懐かしく見覚えのある天井。

そこで思い当たる。

あの群雄割拠の時代、それも最初の居城。陳留の私の部屋ではないかと。それに…少しだけ身体が縮んだ気がする。

もしかして…。

「あれが全部夢だったなんて事はないでしょうね？」

そうつぶやき、急ぎ着替えて部屋を出る。

「やっぱり…陳留のお城だわね」

廊下に出てここが陳留だという事を確信した。

では、夢？いや、もしかしたら…。考えながら、政務室へと向かう。

「華琳様！」

「華琳様！」

私を見つけた秋蘭と春蘭が駆けてくる。

「秋蘭、春蘭、二人ともおはよう。その様子だと、この事態に気が付いているようね」

「はい！」

「はい――」

と、同時に答える二人。

「ただし、推測でしかありませんが」

と続ける秋蘭。

「そうね。でも、きっとそうなんでしょうね」

二人を見て確信した推測――私達は時間を遡ったという事。

「と、なれば、皆がこの城に来るのを待ちますか？」

「それは…どうかしら？皆が来るとは限らないわよ？例えば霞は月達と一緒にいるから、もう我が陣営には来ないでしょう」

それに――と、言葉を続けようとしたが、

「なっ！？霞が来ないとはどういう事ですか！？華琳様！」

春蘭が声を荒げて聞いてきた。

「霞は洛陽にいるはずだわ。あの十常侍を相手にしているのだから、月達を残しては来れないでしょう」

「十常侍？それは……誰ですか？」

「ま、春蘭だもの、覚えているわけ無いわよね。秋蘭、説明お願い」

そう言って、秋蘭に顔を向けると、こっちはこっちで「姉者、かわいいな～…」と、春蘭を眺めて惚けている。

ほんと、姉妹揃って私を楽しませてくれる。思わず笑みを浮かべそうになるが、

「秋蘭！春蘭に説明をしてあげて頂戴」

と、怒鳴り気味に声を掛け、苦笑しながら政務室に入った。

――懐かしい場所。

入った瞬間、懐かしさで足が止まった。

――ここから全てが始まったのよね。

少しだけ昔を想い、懐かしい椅子へと向かう。

「で、春蘭。わかったの？」

椅子に座り、春蘭の顔を見て聞く。

「はい！華琳様！十常侍についてはわかりました！ですが…華琳様？」

「まだ分からない事があるようね――」

申し訳無さそうに私の顔を覗く春蘭に、「いいわ。続けなさい」と先を促す。

「そんなに悪い奴なら、華琳様が辞めさせればよろしいのではないかと――」

「ちょっ――」

「あ、姉者…」

一瞬、頭が真っ白になって絶句。多分、秋蘭もだろう。

その間にも春蘭は「それにしても北郷の奴も不甲斐ない！」とか「桂花も文官の長なら…」とか「霞も霞だ、そんな奴等首をハネれば…何なら私が――」

「待ちなさい！！春蘭！」

怒鳴り声で興奮から覚めた春蘭がハッとし、謝る。

それより――。

「春蘭。今、私達が何故この城にいるのか、理由が分かっているのなら言ってみなさい」

「はい！華琳様！えーと、何故この城にいるかと言うとですね。起きたらここにいたからです！」

胸を張って答える春蘭。

理由になって無いわよそれは。

「まぁいいわ。それでは、何故この城で眠っていたのかしら？私

達は昨日、南陽で眠ったはずよね？」

「それは…酔って眠った私達を誰かが運んだからではありませんか？」

「どうしてこんな所に運ぶのよ」

「それは…部屋が足りなかった…とか？」

「はぁ～…」

思わず溜息が出た。

「もういいわ春蘭。秋蘭、後をお願い」

そう言って秋蘭の方を見れば――。

「姉者はかわいいな～」

そうつぶやいていた。

またなのね。

「…もういいわ。秋蘭、後で教えておきなさい。それと、どういった経緯でこんな事になったのかは、皆が集まってから考えるとして。先ずは――」

一度そこで話を止め、二人の顔を見て――笑顔で言う。

「着替えてらっしゃい」

起きて慌てて来たのだろう。ずっと寝間着のままの二人は、指摘され、お互いの服装を見てから、

「「も、申し訳ありません！」」

と、慌てて部屋を出て行く。

流石に姉妹ね。咄嗟の状況だと同じ言葉が出るなんて。笑いながら二人を見送る。そして思う。

――秋蘭も可愛いところがあるじゃない。

冷静なつもりが寝間着だったなんて、今頃は――。

「秋蘭の顔は真っ赤になってるかしらね？」

もう一度「くくくっ」と笑い、今後の事を考える。

「二度目の覇道。いや、今度は王道を目指すのも悪くないわね」

一度叶った覇道。そんな物にもう興味はなかった。それはそうと――。

「あの馬鹿は何処にいるのよ…」

政務室の窓から外を眺める。

あの頃よりも美しい青空に白い雲が浮かんでいた。

4、華琳の場合（後書き）

華琳は向上心の塊ですからね。覇道の達成にはもう満足は得られないかと思いまして。

月末年末に向け忙しくなるので、更新遅れると思います。

すみませんが、ご理解の程、宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9281x/

真・恋姫†萌将伝 〜群雄割拠再び？〜

2011年10月28日03時09分発行